一遍聖の熊野参籠について（三）

石岡信一

「六十万人の頌」に対する諸説

「六十万人の頌」（神頌）に対する解釈は、従来より種々ある。代表的な解説書は、法阿編の「神勅教導要法集五巻」[1]、慈観撰の「神偈讃歎念仏要義鈔一巻」[2]、賞山撰の「神偈撮要鈔一巻」[3]、写本の「神宣遊行念仏記一巻」[4]、その他[5]がある。「神勅教導要集」は、元文三年一蓮寺の法阿師が宗祖の四百五十年遠忌に際して作られたもので、神偈を各句ごとに分けて字義釈し、その内容を求めたものである。「神偈讃歎念仏要義鈔」は寛文十五年、慈観師の撰、内容は句別に、所念の法、法体の具徳・能念の所契、念仏者の嘉名について論釈を下したものである。「神偈撮要鈔」は正徳三年賞山師の著、名号の法体、名号の徳用、念仏人の嘉誉を明したもので、「神宣遊行念仏記」の立場に等しい。写本の「神宣遊行念仏記」は、遊行二十一祖知蓮、または七祖託何によるとされているが定かではない。しかし、神偈釈の最古のもので、後の神頌釈の基準になった。内容は所念の法である名号実相の法、能念の念仏行者についてである。この外「時宗統要篇」、「時宗要義集」、「直談鈔」、「語録諺釈」[6]の中に神頌釈があり、近年、吉川賢善師が「神勅念仏と六十万人頌義」を、平田諦善師は「神勅念仏論の展開」をあらわし[7]、その解説をほどこしている。また、河野憲喜師の一遍字義釈、及び同師と木村信弘師の一遍字義釈の論争は[8]、神勅の頌釈にまで発展して論説を加えている。そこで、それ等神勅に関する論説の概説を先ず紹介、次にかゝる釈を参考に神勅の頌の真意を探求、如何なる義に釈すべきかを論じ、参籠の意義を明確にしようとするものである。

(一)、神勅教導要法集

「神勅教導要法集」では、六字の字義釈にはじまり、続いて名号の万徳をたたえ、次に五種の正行と他力の善である名号所具の善について述べ、更に一遍法については、一遍と法とに二分し、それぞれ「一遍顕ス徳名ヲ」と「註ニ釈法之字ヲ」の項を設けている。一遍とは名号の徳を表現したもので、三世十方に通貫する永遠普遍の光明であり、その徳は自性清浄で、

しかも不変不異不生不滅の絶対の相で、諸仏と衆生とが無二無別の同一体であると、「名義集」、「法華疏」、「占察経」を引用して説明を加えている。また、法については、煩悩を断じ、自性清浄の法身なる正覚を成就する最善の道が法であつて、それは一法界を意味し、真如の理体に外ならないと「華厳経」、「起信論」および善導のことばをもつて解説を下している。したがつて、第一句の意は、三世十方に通貫し遍満する南無阿弥陀仏の徳を称讃したもので、名号の徳はあらゆる一切の有情をして、永遠普遍絶対の真実界に導く、時間と空間を超越した真実の理体であるという意に解していた。

第二句の「十界依正一遍体」については、十界・依正・一遍・体と分解し概説を加えている。十界については、「十界名義者」として、仏・菩薩・縁覚・声聞・天・人・修羅・餓鬼・畜生・地獄をあげ、「往生要集」によつて八地獄を説き、続いて、「互具十界正説」の項を設け、天台の説や、「妙宗鈔」、「法華経疏」によつて解説、更に「華厳経」を引用して、心・仏・衆生の三が無差別平等を説き、一念帰命の心体は凡聖不二、邪心一如であつて、それは十界互具の法門によるとしている。依正については、「顕依正二報」として、大乗の教説である草木国土悉皆成仏の立場より、依正不二を先ずのべ、現象界に存在する衆生は、そのまゝの存在で自然に円成して十界を展開すると規定している。そして、源信の説によつて、草木を依報、衆生を正報と規定し、草木国土は正報である衆生の依止べきものであり、衆生は過去の業因によつて正しく受けたものであつて、そのあり方は、一切世間および衆生共に前業に応じた果としての存在である。そして、依報である草木国土は、そのまゝで十界の徳を施しており、正報は正報のまゝで一切世間の徳を施すとし、さらに、「円覚略鈔」や「玄義鈔」の説を引用して、国土と衆生の本有の理体である真如を体とする不二一体の無色無形の普遍なる法性法身について依正二報の論理をもつて説明を加えている。一遍の字義については、「一遍云嘉名者神勅也。名号相即一遍体ト口伝焉ヲ神勅ノ嘉名ヘ。前段ス具ニ宣ニ説之ヲ。爰ニ略スル者也」として、略すとしながら説明を加えている。その要旨は、名号実相の真体には、万法の理性が冥合するのであり、不変の相即の名号は、そのまゝの位が十界における真実の法でもある。そして、この十界の法もまた依正二報によるもので、かゝる一切の諸現象諸様相の実体（本質）を一遍体と呼ぶのであつて、「是則名号相即一遍体ト所ニ伝来スル也」で、一遍体も名号に外ならないとした。次の体についても、「明ニ体ノ之字義ニ」として説明を加えているが、その要点は体とは主質（本質）を意味し、諸法実相、するは実相を体というので、体は常住の真心の体で、自性清浄と異るものでない、善導の釈より、念仏三昧を心のより所とし、一心に浄土往生を願う念仏こそ体であるとした。そして以上

のすべては、衆生の称名念仏を本質とするものであるとしている。

第三句の「万行離念一遍証」についても、万行・離念・一遍・証に分解、字義釈を下している。万行については、「因位万行者」として、法蔵菩薩の仏果を得た次第、すなわち、衆生救済の願行成就の修行を意味するとともに、衆生救済の諸功徳をもつた不可思議にして最勝の教法であり、救済の対象である衆生の業行が無数にあるために、万行と呼んでいるのである。離念については、離念とは念を離れる事であり、念にも善悪の二通りの意があり、悟れば菩提善処の念であり、迷いば悪趣の念となるとし、「華厳経」、「楞伽経」、「四教義」の諸説により、妄念を離れた空なる状態を離念とし、「神宣念仏記」より、名号は万善万行であつて欠減する事がなく、また、万行離念の真如の法でもあるとし、万行離念即菩提心について論じている。次の一遍については、前述の通りとし、証についてもさとりに達するから証としたと簡単に述べている。

第四句の「人中上上妙好華」についても、字義釈をしているが、要は、念仏するものの徳は、あらゆる人間の中にあつて最上のものであり、その徳は泥沼にあつて清浄な花をもつ蓮華の如く美しく、かつ勝れたものであると念仏者を讃歎したものであつた。

法阿の「六十万人頌」釈の意図する所は、南無阿弥陀仏の徳は、あらゆる一切の有情を、永遠普遍の絶対の真実界に導くもので、しかも三世十方に通貫遍満している。そして、依正二報の結果によつて生ずる一切の世界の本体は、名号の功徳によるものであり、それはまた衆生の称名念仏を本質とするものである。かゝる名号の徳を形成する称名念仏は、弥陀の大慈悲行である衆生救済の大願成就の結果によるもので、大菩提心にもとずく菩薩道の実践でもあり、また同時に衆生の平安にして安楽な往生の境界でもある。一方、かゝる往生の境界は、貪欲を遠離した無念によるものであるが、この無念はまた万有の本質である真如実相そのものであり、悟りであり離欲であり往生であつた。したがつて、衆生念仏の徳は、人間の最上のもので、泥沼に咲く蓮華の如く勝れたものであると、念仏の優越性を強調しようとしたとみたのであつた。

(二)、神偈讃歎念仏要義鈔

慈観は「六十万人頌」を熊野参籠の折、弥陀口伝の頌文とする立場をとり、四句の偈文を詳細に字義釈している。しかしその要旨は、名号の徳、すなわち、思想内容とその機能を、絶対的立場、空観の中に位置づけし、天台本覚思想の論理的展開を思わせる論法で、法体具徳と十界依正を訳し、熊野証誠殿の神勅を一念口称の当体とし、また同時に、本願成就の

弥陀の大慈悲行とした点に、その思想的基礎をおいた点に特徴をみる事が出来る。そして、彼は巻末で、「抑当門立宗之濫觴者。正依二神勅一。承レ勅立レ宗宣旨奚易。」として、神勅を立宗の基礎としている。彼は寛文五年（一六六五年）三月二十五日、この書物を記し終っておりそれ以後の神偈釈に直接多くの影響を与えた。

㈢、神偈撮要鈔

賞山は算賦札の文「決定往生六十万人」に対する質問と解答の形式で当書を著し、六十万人偈釈を行っている。その特色は、一遍と名号を「名号ト一遍ト言異意同」と釈した点にある。さらに彼は、単に偈文のみの解釈にとどまる事なく、賦算の意義と偈文との関連、そして名号の功徳を強調した。しかし、この立場は次に述べる「神宣遊行念仏記」の影響を受けたと解される。（紙数の関係上、大部略してあるので不明な点は東洋学研究10、所載拙論「一遍聖の熊野参籠について」（三）を参照して下さい。尚、「神宣遊行会仏記」以下は次回に発表させていただきます）

註

1　大日本仏教全書69巻所載、巻末に元文三年仲秋廿三日、稲久山法屈法阿関牛上人謹誌とある。

2　大日本仏教全書68巻所載、慈観師は真壁町常永寺より後年、越前、敦賀市西方寺、更に寛文十三年（一六七三）四条金蓮寺に転進し、廿九世浄阿上人を継承、天和二年（一六八二）十二月廿九日五十九歳で入滅した。

3　大日本仏教全書68巻所載。賞山は兵庫真光寺四十五世尊遵上人の資、「播州問答私考鈔」。五巻「一遍上人絵詞伝直談鈔」十三巻、「一遍上人別願和讃直談鈔」三巻、「浄土三蔵義引文私考」三巻、「諸経弥陀採摘」二巻「二十五菩薩名義鈔」、「一遍上人誓願文標示鈔」、「百利口語」各一巻の多くの著書を著わした。

4　写本、遊行七祖託何、二十一世知連ともいわれるが不明、神勅を釈した最古のもの。

5　「時宗統要篇」の中の「神勅領解分」や、「時宗要義集」、「直談鈔」、「語録諺釈」の中で釈している。

6　「一遍上人絵詞伝直談鈔」では「神勅之偈頌之事」、「一遍上人語録諺釈」では第二の「六十万人頌」の中で釈している。

7　吉川師は「一遍上人の研究」、平田氏は「時宗教学研究」の中で解説をしている。

8　「時衆研究」56号57号で論争をとりあつかっている。以下紙数の関係で註は略します。